

るのほな

千葉大学医学部同窓会報 第76号 題字 鈴木五郎

編集兼発行者

千葉大学医学部

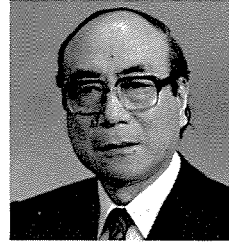
るのほな同窓会報編集部

〒280 千葉市亥鼻1の8の1

千葉大学医学部庶務係気付

電話千葉(0472) 22-7171内線2038

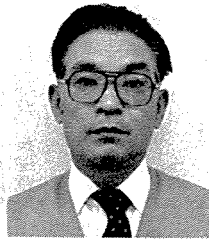
附属病院長 中央放射線部長 看護学部長(再任)



渡辺昌平教授

渡辺昌平教授 植松貞夫助教 石黒義彦教授

なら現時点は、まさに再生興隆の時かもしれません。ちょうど医学部研究棟も完成しました。本学をとりかこむいろいろな環境はそろったようです。すぐれた基礎医学の力をかりな



植松貞夫助教

このたび千葉大学附属病院長に選出され、昭和56年4月からその任務につくことになりました。いまでもなく、大学附属病院は教育・診療・研究を行なう場であり、本学附属病院は地域の特殊性から、地域医療と極めて密な関連性をもつていて、これがよきにつけ、あしきにつけ大きな問題となっております。診療の本来から、患者に親切・迅速・正確であるべきでしょう。しかし現実を直視しながら、ゆめゆめ大病院の本質を失ってはならないと存じます。

このたび皆様の御推挙により山部長の後任に就任させて頂いたきました。放射線部は御存じのようにX線診断、核医学、放射線治療という非常に大切な三部門を包容しております。最近におけるX線診断、核医学、放射線治療の三分野における診断治療技術、利用される装置、さらにこれらによってえられる情報処理の進歩にはまことにめざましいものがみられます。食道・胃腸・肝臓等の消化器領域、心・血管領域、呼吸器領域さらに泌尿生殖領域等に対するX線診断の進歩とともに画像診断としてのCT、RI、超音波装置等による診断法のはたしている役割を考えてみれば誰もが理解してくるものと考えられます。

い臨床は弱いというのがわたくしの持論です。今後、基礎医学と緊密な連絡を保ちながら、期待される千葉大学病院として、新鮮味あふれ、どこか魅力のある特性をもった大病院づくりに努めたいと切に望んでいます。諸先生、先輩ならびに同僚各位の、かぎりなきご援助をいただきますようお願いいたします。渡辺昌平(昭20卒)

渡辺昌平(昭20卒)

幸いにして私は大学院生時X線

診断核医学放射線治療の三分野にわたり研修させて頂いた。又その後は現在にいたるまで第二外科教室にて消化器外科を研修する。また消化器疾患の診断学を研修してきてきた。これからは放射線部で即ちX線診断核医学放射線治療という広大な分野で各診療科と密接な関連をもちながら大学にとよりよい放射線部にしたいという所存であります。浅学非才ではありますが皆様の御指導を心からお願いいたします。植松貞夫(昭35卒)

植松貞夫(昭35卒)

看護学部長

石黒義彦

(昭24卒)

昭和54年4月看護学部長に就任以来、早くも任期の二年間がたちましたが、このたび引き続き学部長として再選され、学部の運営に携わることになりました。看護学部も発足後六年、三月には第三回目の卒業生を送りだし、

また特にわが国では初の大学院研究科(修士課程)修士生13名にたいし看護学修士が授与されたことは、看護学の今後の研究・教育の発展進歩にとって極めて意義深いことでもあります。現在看護学部校舎の不足面積が三五〇〇平方メートルあり、医学部の木造校舎をお借りしている状態ですが、旧医学部基礎棟の改修工事事も十月には完成移転の予定であります。

熊谷教授着任十周年記念講演会

記念講演会

昭和56年2月14日、頭書の記念講演会が、市内グランドホテルで行なわれた。富岡講師の司会で開会。昭和46年2月、まだ揺れ動いていた二内科の主任として着任した熊谷教授は、その第一印象「千葉は寒いナと感じました」と語り出し、スライドを巧みに使って、その後十年の教室の歩みを、免疫アレルギーグループ、内分泌グループなどに分けて、個々の研究について要領よく詳細に説明、最後に山村雄一学長の「夢みて行ない、夢みて行なう段階で」ここまで来てしまいました」と結んだ。

講演会終了後、徳政講師の司会で祝宴に入り、まず河野秀夫二内科同窓会長の挨拶、香月学長、相磯前学長のそれぞれ熊谷教授着任当時をふりかえってのお話があり、九十才というご高令でなお矍鑠たる佐々貫之先生の音頭で乾杯。さらに、山村阪大教授、奥田一内教授の祝辞がつぎ、熊谷教授の謝辞、渡辺昌平教授の発声で万才三唱と会は進行したが、学内の教官、二内同門の諸先生のほか、前出の佐々先生ご夫妻、山村 堀内、五島先生や、矢野富山医薬大教授、宮本東大教授等、他学からのご来会者も多く、約二百人でさしもの会場も人に満ち、本学に内科が出来て丁度百年というこの祝宴をもち上げるにふさわしい一夕であった。

各地るのほな会だより

九州るのほな会

遠く母校を離れた九州の地でも、過去何回か同窓会を作ろうという声があった。しかし、各県別となる人数が足りない所もあり、九州全域では広範囲に汎るため充分な連絡がとれず、何時も企画倒れになっていった。

昨年一足さきに「沖繩るのほな会」が発足したことが、るのほな同窓会報に掲載され、また、同窓会のご盡力により、各県別の会員名簿が配布され、九州に五十一名の会員が居ることがわかり、九州に同窓会支部をという気運が急速に昂まった。因みに会員数は福岡県十六名、佐賀県四名、長崎県七名、熊本県九名、大分県七名、宮崎県二名、鹿児島県六名である。

会員数の多い福岡県在住の古寺秀喜(昭22)、西高廣(昭23)、田代豊一(昭24)、谷川久一(昭32)敬称略)が世話人となり、九州地区の同窓生に会結成の呼びかけを行なった。幸い殆んどの会員の方から賛意を得た。

昭和五十五年十一月十五日(土)、午後六時から福岡市の「はかた会館」で結成式並びに第一回目の会合を開催した。同日九州各県から二十数名の会員の参集があり、会則及び今後の会の運営について話し合った。決定事項は次の通りである。

一、本会を「九州るのほな同窓会」と称する。

一、早急に会則を決め「るのほな同窓会」本部に送り、連絡を密にする。

一、貫文三郎九州大学名誉教授(昭3)、友永得郎長崎大学名誉教授(昭3)、安中正哉長崎大学名誉教授(昭5)を名誉会員とする。

一、各県に一名ずつ幹事をおく。幹事・福岡県―西高廣(昭23)、佐賀県―森永宗雄(昭22)、長崎県―山口国行(昭37)、熊本県―山下卓(昭29)、大分県―大藤達(昭33)、宮崎県―森下博夫(昭19)、鹿児島県―米市旭町六七(昭18)。

一、谷川久一(昭32)を代表世話人とし、同氏が教授をしておられる久留米大学第二内科(久留米市旭町六七)を事務局とする。発会式を終り、懇親の宴となつたが、永年の間、遠く母校を離れて暮していたことで、より一層そ



の親密さを増し、年代を超えて歓談に花が咲いた。またお互いに初対面の方もあった筈であるが、一夜にして親しい友となり、それぞれの想い出話に時の経つのを忘れさせる情景は、正に同窓会ならではの光景であった。第一回九州るのほな同窓会を無事終了、来年の再会を期し、三々五々夜の博多の街に散つた。

出席者名、貫文三郎(昭3)、友永得郎(昭3)、安中正哉(昭5)、米市旭町六七(昭18)、松本第一郎(昭20)、古寺秀喜(昭22)、森永宗雄(昭22)、手島第一郎(昭23)、西高廣(昭23)、田代豊一(昭24)、原寛(昭26)、小出紀(昭29)、山下卓(昭29)、谷川久一(昭32)、大藤達(昭33)、佐藤三郎(昭33)、谷川章子(昭33)、津金沢雄雄(昭34)、下島隆生(昭36)、山口国行(昭37)、長尾竜郎(昭40)。(西 高廣記)

東京るのほな会

昭和56年1月24日(土)、恒例の東京るのほな会新年会が、日本橋「たいめいけん」で開催された。当日は本部より、井出医学部長、奥井教授が来賓としてみえられ、大学の現況、同窓会の活動等につきお話頂いた。次いで東大教授として赴任された多田教授に、同大学におけるユニークな活動ぶりを披露して頂き、中村民比古会長より、次期総会に際し、免疫についての講演を御願いし、先生の快諾を得た。

懇親会に入り、歓談の間に、卒業年度順に交々語って頂いたが、他の大学で活躍されている方も多く、当日の出席者の中にも、東京医歯大学窪田金次郎教授(解剖学・昭23卒)、帝京大学植田伸夫教授(生化学・昭34卒)、東京大学北沢克明助教授(眼科学・昭36卒)がおられた。各大学における苦勞話など伺った。また開業勤務を問わず各方面で充実した毎日を送つておられる由承り、頼もしい限りである。若い会員の方々も徐々に出席されるようになり、会の運営に関しても、五年ぶりの名簿改訂も終り、終身会費制の導入により、会費徴収も軌道にのつて、これから東京るのほな会の新しい発展が大いに期待される処である。なお次に期待される処である。なお次に開催は六月下旬、新宿、京王プラザホテルで行なわれる予定である。(神田尚忠・昭和32年卒)

安房るのほな会

昭和56年2月4日(水)館山市ホテル海幸苑で、佐藤孝三教授・牧野教授・奥井教授をお迎えして総会を開催しました。

恒例のように、牧野教授・佐藤教授から、専門分野の講演をして頂き、大学の現況を牧野教授が再び報告して下さい、臨床講義の為に電車遅れた奥井教授からは、宴会になってから御挨拶を頂きました。

出席会員が31名ともなりますとなかなか賑やかで、三人の教授を取り囲んで談笑がいつ果てることもなく続きました。(青木 謹記)

木更津・君津るのほな会

君津郡・木更津市支部るのほな会は、発足以来20余年を経過、現在会員数も66名を数えるに至っております。御承知の通り、君津郡市も今日では、木更津市・君津市・富津市・袖ヶ浦町と三市一町の行政圏に変貌し、新日鉄はじめ数多くの企業の進出に伴ない県南における中心となつてまいりました。さて昭和55年度、当支部るのほな同窓会総会は、去る2月20日、本部より、薬理学の村山 智教授・第一外科の奥井勝二教授をお招きし、木更津市温泉ホテルにおいて開催されました。

当支部の川本 勉会長(昭和16年卒)の挨拶に続き、55年春の叙勲の栄をうけられた三枝 敏先生(昭和3年卒)に記念品の贈呈が行なわれました。

幹事による会務報告のあと役員改選が行われ、会長は川本 勉(留任) 幹事は、川之元 茂(留任)、久米通生(昭和33年卒)(新任)に決りました。

引き続き、村山・奥井両教授より、基礎・臨床の立場から、千葉大学の現況について詳細なお話がありました。記念撮影についで懇親会に入り、ここかしこに新旧相交つて盃を汲みかわす団樂が生まれ、一方当地の芸妓による「木更津甚句」の唄と踊りか披露されるなど、二時間余の宴会がまたたくまに過ぎてしまいました。最後

ちらり中国 ①

(川之元 茂記)

中日友好病院設立準備事前調査団といういかめしい名前の団体の一員として、稲垣教授とともに3月4日から11日まで北京に行つて来ました。

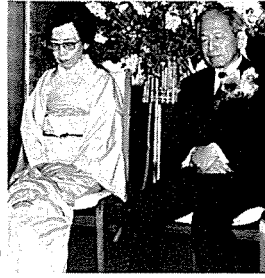
中六日の間に中国衛生部(厚生省)、科学技術院の訪問、二つの大学、二つの病院、人民公社の見学を挟んで数度にわたるあちら側の代表者との交見があり、一流のホテルに泊められ、送り迎え自動車というところで、自由な時間がほとんどありませんでした。中国を見て来たと言えれば嘘になるかも知れません。まあ、水底を見て来た顔の小鴨かなの小鴨のつもりで報告させていただきます。

それにしても「文革」のすさまじい破壊力と、それから必死になつて立ち直ろうとしている中国側の熱意というものを、ひしひしと感じましたが、これについては次の機会に触れたいと思います。中国はなんと言つても文字の国、大抵は判読できるのですが、さて次の言葉がおわかりになりますか。

まず路上にて①小心火車、②人行横道、病院にて③珍室、④葯室⑤儿科、⑥妇科、研究所にて⑦动物室、⑧電鏡室、⑨医用数据处理室、ホテルにて⑩男盥洗室。

正解は四面にあります。本新聞に余白がありましたら、続報を載せさせていただきます。(萩原)

相磯前学長 囲み出版祝賀会



研究所や長柄ふるさと村などを足場に幅広い活動を続けられた内容に書かれたり講演された内容を一本にまとめ、自らの学究生活の足跡なども盛り込んでおり、人間のからだのしくみは生理学としてばかりでなく社会学または人間学として十分に研究対象となり得る点を強調されている。

前学長相磯和嘉先生の著書「抑制の原理」(篠原出版) 出版祝賀会がさる二月六日午後五時から千葉市本千葉町ほてい家で盛大に開催された。

当日は千葉大学関係者ほもとより、実業界、文化・芸術分野、政界などからも多数の方々が参加、七十二歳を迎えた著者、夫人を囲み、各界の人々が楽しく歓談し、意義深い出版記念パーティとなった。

書

抑制の原理

相磯和嘉 著

本書は、前千葉大学長の相磯和嘉博士が千葉大学公開講座、千葉市民講座などの特別講義の講演内容を基にして編れている。

内容は、第一章の「からだのしくみに学ぶ」では生体機能の恒常性を維持に必要なフィードバック機構を解説し、第二章以下では、広く科学技術、地域社会における調整機構としてのフィードバックメカニズムを論じている。著者は雑文集と謙遜しているが、これは片

評

肘張った教科書的な文章ではないという意味に取るべきであろう。著者の専門領域である食品衛生に関する問題点を取り上げて「安全性論議」では、食品添加物の安全性と有害性ならびに食中毒の特徴とその推移について、豊富に生データを示してかなり突っ込んだ議論が展開されているが、あくまでも平易に説かれていて、移り気な門外漢をも飽きさせない。

章によっては、著者が表題で掲げた主題が必ずしも明確に絞られて論ぜられていない憾みがあるが、本書が「書き下し」ではなく、講演集であるためであろう。

久貝麦門句集

「しどみ」

子供の頃から相次いで襲う病魔と、それによって翻弄される自分の気持を、単々とした語り口で述べた「裏から読む私の病歴」といった随筆も挿入されている。本書は科学教養書でありながら、縁側の陽だまりの暖かきを感じさせる。

篠原出版二千五百円 (A・T)

久貝貞治(麦門)先生はご承知のように昭和二年本学卒の大先輩で、現在千葉社会保険病院名誉院長、組合立長生病院長として、お元氣にご活躍なされているが、今回永年の句業をまとめられて上梓された。

先生は一内科に入局して間もなく俳句を始められ、当時の石川憲夫(東郊)助教、さらに加賀谷凡秋先生について俳句を修業されたが、昭和十三年結核療養所の所長となられてからは、いわゆる療養所俳句の指導者として「野の花」句会を主宰、門下に多数の俳人をお育てられた。現在は「河」「人」の同人である。

その五十余年の句歴の中から昭和二十六年より五十年の二十五年間秀句のうち六二〇句を選んだのが句集「しどみ」である。紙幅の関係で二三の句をあげるにとどめるが、

水におく影より暮れて花あやめ 早梅や鶴の棲む森に抱かれつつ など初期の作品にはホトトギス調の穏かな描写の秀れたものがあり、昭和三十一年のスト時代には

北風に鳴る養虫吾はた、黙す色褪せてストの赤旗薄暮来などの作品を退して擲筆される、退任の青空ばかり寝正月しかし、昭和四十年には再発足、土用灸の新しい背を聴診す昭和四十二年に叙勲、

なお集中の処々に先生自筆の短冊や色紙、額血などの写真が挿入されており、また「しどみ」の花の写真と、あとがきから抜粋された句集名の由来の書かれたしりとりが挟まれているなど、心憎いばかりに配慮の行き届いた句集である。この句集の刊行に当って、尽力された刊行会の方々のお骨折りも含め、大先輩の句業の世に出たことを心からお祝い申し上げ、今後とも一層のご健吟とご健康をお祈りする次第である。(季葉)

クラス会だより

華葉会(昭15年卒)

卒業四十年目に当る昭和55年11月22日、箱根湯本でクラス会(華葉会)を開催した。

たいと言っていたが、開校準備で忙しく、遂に欠席となった。弘前の山田君、島根県浜田市のお斎藤君もやはり駄目だった。斎藤君からは幹事の小生がお手紙を頂いて、元氣のことで安心した。横浜の稲村君(旧姓楊君)は欠席となったが、電話で元氣なことが確認できた。

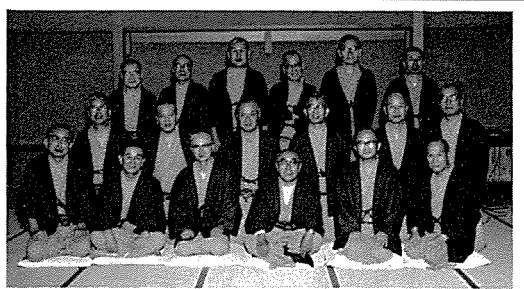
連休の前夜で出易かったのか、出席者は十九名を数えた。頭が薄くなっていたり、白髪になっていたも、互に誰れであるのかはすぐにはわかった。

級友諸君の近況報告のあと、常任幹事谷茂岡洋君の音頭で乾杯し会が進行。次いで、先頃、第一外科の教授を退官した伊藤君から挨拶があった。現在も教室のこと、学会関係の仕事で活躍されている様子なので、今後も健闘を期待する次第です。

今回は連休を後に控えていたの、遠方の方の参加を期待したがそれぞれ理由で、やはり不参加となった人が多かった。沖繩大に赴任した小張君はなんとか出席し

その後、各自の近況報告や、思いつきの唄の披露など宴は尽きなかつたが、一次会はひとまず閉会とし、二次会では大学の現況、開業医の将来等を夜のふけるのも忘れて語り合った。

次回は静岡在任の宮内、白井、小沢の三君のお世話で開催の予定である。(勸 祐三郎記)



昭和28年卒

昭和28年卒クラス会は、去る2月14日(土)、東京・麹町会館にて小瀬君と学内有志を幹事で開催した。今回は奥井君の第一外科教授就任の祝賀会も兼ねての約二年ぶりの集会で50名近い同僚が集まった。お互に齢50才を越し、初老は致し方ないが意気盛んな処あり、話題は尽きなかった。新しい話題として、鈴木正一君の長男が本学医学部医進課程に入学し、専門課程には山田達哉君・鈴木正巳君・田中稷君の二世もおり、将来が楽しみですである。また二年後には卒業後30周年を迎えるわけで、盛大なクラス会を行なうことも約束した。いつも幹事役をやってくれた富山医薬大の窪田君、生憎の豪雪で出席出来なかったのは残念であった。

日本眼科学会総会を迎えて



石川 清教授

第八十五回日本眼科学会総会は昭和五十六年五月十五日(金)十七日(日)の三日間にわたり、千葉市で県文化会館・医学部記念講堂において開催される。千葉で日眼総会が主宰されたのは昭和十五年のことで、第四十四回日眼総会が伊東弥恵治名誉教授によって主催されて以来四十一年振りになるわけである。責任の重大なることを痛感している。

本学会では、招待講演一題、特別講演二題、シンポジウム一題(以上別掲)、一般講演一〇〇題およびポスターセッション二十二題が発表される。招待講演のヘンケス教授は人眼 E.R.G. の記録に成功し、その臨床的応用と相俟って視覚電氣生理学を今日まで発展させてきた。此の方面の世界的な第一人者であり、現在は網膜の情報にとどまらず視神経後頭葉皮質中枢からの情報パターンとしての V.E.C.P. の権威でもある。氏の中広い蘊蓄の深い講演が期待される。特別講演の水野教授の報告は永年にわたる遺伝性網脈絡膜変性症に関する研究

の集大成であり、今回はとくに脳回転状網脈絡膜症を中心にオルニチン代謝異常と関連して格調高い講演が楽しみである。練山教授は視神経炎に関する教室の伝統的な研究を発表させ、新しい概念としての軸索輸送の障害として把握し、また V.E.C.P. の面からも検討された新知見が報告される。宿題報告は三人の講師により報告される。硝子体は眼球の中で最も大きな容積を占める重要な組織であるが、従来余り研究されていぬ領域であるだけに興味を持たれる。発育期の硝子体の特性とその可溶性蛋白代謝、環境因子による影響と障害、硝子体手術の適応と臨床成績等が報告される予定で、今後の研究の方向付けが示唆される。一般演題は一〇〇題、ボス

ターセッション二十二題で応募一九九題より二十五名の演題選定委員により厳選されたもので、活発な質疑、討論が期待される。多数の先輩各位の御参加をお待ちしております。千葉大学医学部眼科学教室

- 招待講演 The clinical aspects of electrophysiology of vision. H. E. Henkes 教授
ロッテルダム大学
- 特別講演 遺伝性網脈絡膜変性症の臨床と病態生理 水野 勝義 教授
東北大学
- 視神経疾患の診断と治療 練山 義正 教授
神戸大学
- 宿題報告 硝子体の諸問題 秋本 谷田 忍 助 教授
慶応 義塾 大 学 大 学 大 学
東京 都本 大 学 大 学

第85回日本眼科学会総会に 関連して (明徳会について)

第85回日本眼科学会総会開催に関連して、明徳会の事など
大正八年、故伊東弥恵治先生が、千葉医学専門学校教授として御赴任以来、本年は六十二年になり、在職中の昭和十五年に千葉に於て催されて以来、四十年の歳月が流れ去りました。今総会がくしくも伊東先生晩年の御弟子さんである

に於て、先生の奥様を中心にして二十数名集まり御法要を営みました。

その他、毎年、先生の初期の御門下の方々、遠くは広島森信さん、秋田の堀江さんらの御來臨を得ても、先生を偲び、併せて時代を隔ても、眼科学教室の流れを酌む同門の集りを続けてきました。

伊東先生の奥様は私達同門の家徽として御健在の限り御臨席を願ひ毎年楽しい一夕を過ごすことにしております。

星移り物換わり、明治大正生き残りの頑愚さは、昭和生れの方々には眉をひそめられるかも知れません。さればとて止めるわけにはいかぬ、そんなグループが一つや二つ、るのはな同窓会の中にあっても悪くはないと思っております。

右は御願傍々御報告まで。
明徳会世話人・筒井 栄
(昭六卒 記)

訃報

- 新井 重 郎氏 (明治43卒・50・1・30死亡)
- 金 谷 貫一郎氏 (昭和16卒・55・11・30死亡)
- 岡 田 毅 氏 (昭和19卒・55・12・12死亡)
- 泉 豊 氏 (大正13卒・55・12・14死亡)
- 手塚 恒 彦氏 (昭和19卒・55・5・14死亡)
- 松 村 吉 之氏 (昭和4卒・56・1・4死亡)
- 村 井 普 氏 (昭和9卒・55・1・9死亡)
- 伊 藤 是 氏 (昭和2卒・55・6・23死亡)
- 後 藤 五 郎氏 (大正12卒・55・8・28死亡)
- 吉 川 長 雄氏 (大正13卒・56・1・15死亡)

編集後記

○桜花、爛漫の頃となり、会報76号をお送り致します。年中行事ですが、三月は入試、卒試と忙しいシーズンです。本年も一〇二〇名の新入会員が同窓生となりました。去る3月23日、卒業式が施行され、夕方ニューパークホテルで、卒業生とるのはな同窓会の共催で、謝恩会と歓迎会が開催された。非常にユニークな運営で、楽しい一時であった。新入会員のたゆまぬ努力で、立派に育って欲しいと願う次第である。

- 山口 一 雄氏 (専24卒・54・8死亡)
- 尾 崎 弘 記氏 (昭和43卒・56・1・26死亡)
- 長谷川 文 博氏 (大正14卒・55・9・13死亡)
- 北 村 太 郎氏 (昭和19卒・56・2・8死亡)
- 吉 井 喜 一氏 (大正5卒・55・8・2死亡)
- 千 葉 政 芳氏 (専25卒・56・3・23死亡)

謹んで哀悼の意を表します

(二面、ちらり中国の解答)
①汽車に注意(つまり踏切)、②横断歩道、③診察室、④薬局、⑤小児科、⑥婦人科、⑦動物室、⑧電子顕微鏡室、⑨医用データ処理室、⑩男子用トイレ(これはホテルでの標示、一般には廁所または単に廁という)

・整形外科・脳外科・肺癌研究所等の病室であった木造の建築物が殆んど取壊され、整地も終わった。七天皇塚の巨木が目立っており、このあと地利利用は、長期計画委員会の決定をまつて、整備されることになっておりますが、会員としては、同窓会館の新築を一日も早くという気持は皆同じと考えられる。
○各地のるのはな会・クラス会の記事お送り下され、お礼申します。これらのニュースを通じて、会員の動静を知る場としたいと思います。(奥井勝二)